読み物

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌

J-step 大会の運営に始まり、IOF 理事会、韓国でのコースプラン。毎週のように続くレースとトレーニング。３月によく働いたご褒美に買った Eagles の Life in the fast lane が胸に響く。

▲長良川のアドベンチャーレースは、奇しくも４８歳になる日であった。チームメートの利佳ちゃんとまどかさんの計らいで、皆の前で誕生日を祝ってもらい、ケーキをいただく。左うしろに写っているのは重鎮こと池田さん。45 歳を越えたこの二人のチームだけが、女性不足のこの世界にあってバブリーな女性二人チームであった。いくつになっても楽しいことは待っているものだ。

大谷川再び

4月2日

世界選手権選考会準備のために日光に出かけた。電車で行くつもりでいたが、選考会に出るより自由に走りたいと言う宮内を連れて車でいくことにした。ラップをとりながらテープ巻きをする。ラップの合計は 38 分。止まりながらだから、トップもほぼこんなペースだろう。少しだけ長くすればちょうどいい。あっさりしたコースだが、選考会としては順当な結果がでやすいはず。（もっともこの予想は選考会で完璧に覆された。山口のタイムには脱帽だった）

その晩は 2 年ぶりに大谷川ユースホステルに泊った。1985 年に日光インカレを準備して以来のつきあいだ。25 年前とちっとも変わっていないアットホームさにくつろいだ時を過ごす。

4月3日

昨晩山川が透析から帰った後徹夜で仕上げたスプリントの地図にコースプランをして、テープ巻きに出かけた。宮内はその間、再びミドルのテレインに出かけて男子エリートのコースをルートを変えながら３周して、大満足の様子。

▲J-step 大会は今年も 100 名をこえる初心者の参加を得た

4月5日

清水区での一般向け大会も２回目となった。昨年は至近の小学校の 5，6 年全員にビラを配ったところ 30 名の参加があった。今年は全校児童に配った。家族連れを含めた 70 名近い参加者があり、全部でも 104 名の参加があった。今年も子どもたちや家族連れが楽しそうに走り回った。

Life in the fast lane

4月7日

気の抜けない入試を無事切り抜けたご褒美にアマゾンで CD を買った。１枚はバッハの無伴奏チェロ組曲、もう１枚は高校時代にロック好きの同級生から借りて、唯一フィーリングに合ったイーグルスの「ホテルカリフォルニア」。表題作が文明社会の利便性や快適さに囚われの身となっている私たちの状況の隠喩であることは知っていたが、収録曲のタイトルはすべからく自分の人生を隠喩しているかのようだった。第３曲はずばり Life in the fast lane（駆け足の人生）。元々怠け者だった僕は、中学校時代の勉強とオリエンテーリングで、目標に向けて努力して得られる結果の甘い味を覚えてしまった。それ以来「駆け足の人生」を送っている。それは天国にも地獄にもなりえる（could be hell or could be heaven）。

しかし、これからも、この甘い味から逃れることはできないだろう。だとしたら、突っ走るしかない。そこが自分にとっては最後に戻るべきところ（the last resort）なのだろうか。

4月9日

IOF の理事会のためフィンランドに出発した。昨年のウクライナでの理事会以来、学内の仕事で２回続けて欠席した。７月の IOF 総会で任期が終わるが、再選には立候補しないので、８年間の理事としての最後の理事会となる。

4月10日

教育界で「フィンランド」といえば、国際学力テスト世界１の国である。2003 年にその結果が発表されて以来、多くの日本人教育関係者がフィンランドを訪れている。そのブームが嫌で、何度もフィンランドに来ているにもかかわらず、フィンランドの学校を訪れなかった。

今回がヘルシンキに仕事で来る最後のチャンスになるかもしれないと思い、フィンランドの学校を訪ねることにした。

2005 年の日本チームのコーチを勤めたイーキスの奥さんは小学校の先生だ。

イーキスに連絡を取ったが、なかなか返事が無かった。諦めかけていた出発前日メールがあった。予定が整ったので、10 日にタル（奥さん）の学校を訪れることができるという。タルは２歳の子を抱えて、初夏には二子が誕生するという。産休中の時期に、彼女は僕を学校に案内してくれた。

自分の目でみたフィンランドの教育は、僕には日本と大差ないように思えた。先生の指導スキルが格段に高い訳でもなければ、特別な共同学習をしているわけでもない。少人数クラスも効果は大きいが、西洋では常識だから驚くほどのことでもない。先生に敬意を払わない親は増えている。先生の言うことを聞かない子どももいる。教育環境自体に大きな違いはない。

むしろ僕が印象深く感じたのは、教室が静かで、先生も非常に静かな声でしゃべっていることだった。中には静かな BGM を流している教室さえあった。もっとも成田空港とバンタ（ヘルシンキ）空港を比べてみれば、それが教育界に限らないことはすぐ分かる。彼我の教育の違いは結局文化全体の違いなのではないだろうか。

▲イーキスと久しぶりの再会。案の定一緒にトレーニングということになった。

その日の夕方はイーキスと一緒に公園でスプリントのトレーニングをした後、スントの従業員向けに行なわれていたオリエンテーリングの講習を見学した。大国フィンランドの講習だけに期待していたが、特段に優れたものには思えなかった。時々イーキスが「競技的なオリエンテーリングではそうだけど…」と、コメントをする場面も多々見られた。

4 月 11 日

今回の理事会は午後からだったので、午前中はフィンランド連盟を表敬訪問することになった。スキー O の世界選手権の準備では随分世話になっていたので、事務局長のミッコには会って直接礼を言いたかった。彼はフィンランド連盟とその活動についてのプレゼンテーションを見せてくれた。連盟の規模は違っても同じような悩みもあるようだ。午後、理事会。

▲フィンランド連盟で、連盟の説明を受ける。予算規模でもメンバー数でも JOA をはるかにしのぐが、同じような問題を抱えているのが面白い

4 月 12 日

理事会も終わり、夕方の飛行機で帰国する。理事としてヘルシンキにくるのも、今日で最後だと思うと、かすかな感傷が沸く。出国手続きの列に並んでいる時、99 年に取得したパスポートをめくってみると、９年間に 31 回出国し、ヘルシンキには７回もやってきていた。不安の中ではじめて海外に出た二十歳の時、こんな生活を送るなんて予想だにしなかった。

相馬さん効果

4 月 19 日

APOC の時に、ちょうどソウルで認知心理学の国際学会が開かれていた。学会１日くらいは抜け出せるだろうと思い、３月末に概要を添えて申し込んでいた。その国際学会の概要査読が、日本の認知科学会を通じて依頼されてきた。こちらも APOC の運営みたいな火の車状態だ。

概要の査読は、半年ばかり雑事に追われ研究がかなりおろそかになった頭にはいいウォーミングアップだ。先週のフィンランド行きで、英語を読むのが少しは楽になった。身体同様心の障害にもリハビリが必要なのだ。午前中はこの仕事を片付ける。

昨年の山岳耐久レースのチャンピオンの相馬さんがこの４月にうちの団地に越してきた。この日は、彼と宮内とで日本平へ走りに出かけた。４月４日に越してきて以来、相馬さんはほぼ毎朝日本平を走っているようだが、今回の「フルコース」には満足の様子だった。相馬さんは家族の時間で戻ったが、その後はあかねちゃんを誘ってクライミングへ。レースのために毎朝山を走っている知人が近くにいるというだけで、トレーニングにも張りがでる。

4 月 20 日

大学まで自転車で、帰りは日本平各所を周りながら帰ってくる。日本平は市街地の中にあるが、奥が深い。富士山麓でやる予定だったロゲイニングは日本平に変更しよう。

4 月 21 日

非常勤をしている県立大学での２回目の授業。毎年２回目は、野草を摘んできて草団子を作りながらのピクニック。僕の年代でも、手作り草団子を食べた記憶は一度だけだ。まして、今の学生たちにそんな経験のある子はいない。身近に生えているものがおいしく食べられる。当たり前だがなかなか経験できないことを実感してほしい。そしてできれば次世代にも伝えてほしい。彼らの多くは介護福祉の仕事に就く。彼らが高齢者に何かをしてあげるのではなくて、今日の授業を思い出して草団子を高齢者と一緒に作ったら、高齢者にとっても介護以上の効果があるに違いない。

ノリのよい２年生は、本来の授業時間の 16:10 を遙かに超えて 17 時すぎまでやっていた。自分にとっても楽しい一日であった。

もう一つの試練

4 月 23 日

来週の 29 日には長良川のアドベンチャーレースがある。慣れた阿闍梨のメンバーではなく、まどかさんが加わり、女性２名のチームになる。当然一人一人の役割は変わる。チームメイトとレースの展開についてやりとりするが、考え方のずれがなかなか解消できない。レースをすれば意見をぶつけることがある。それを乗り越えることも、アドベンチャーレースにおいては重要な要素の一つなのだ。体力的にも劣るまどかさんを加え、僕と利佳ちゃんはこれまでにない、そして苦手な役割をそれぞれ果たさなければならない。そんな欠点だらけの僕らのチームがレースに臨んだら何が起こるのだろうか？それは試練であるが、楽しみにすら思える。

4 月 24 日

ホームセンターにいって、マウンテンバイクセクションでまどかさんの MTB をひっぱる牽引用具作成のための道具を物色する。最初は自作するつもりだったが、いい部品が見つかった。かなり簡単にセッティングできそうである。夜ベランダで、作業。

4 月 25 日

病院にいき、授業のあとゼミをして、慌ただしく韓国に出発。今や大病院の

精神科は大繁盛。早起きして、正規の受付の30分以上前に自動受付機で登録しても12番とかいう順番になってしまう。患者の話を聞くのに時間のかかる精神科では、12番だともう２時間半待ちである。早起きと長い待ち時間は気分を鬱にさせる。昨年度末まで世話になった加耶ちゃんは３月で退職。今日からはやはり女医の涼ちゃん。昨今、まともな精神科医はたいていうつになるという。

4月26日

韓国でリレーのテレイン視察。地図は一応仕上がっているものの、細かい地形表現にはまだまだ改善の余地がある。二次調査で徹底的に直す必要がある。

午後はコースプランのワークショップだったが、運営面で問題を解決する議論のため、ワークショップは２時間以上遅れて始まった。東大OLKにいた車さんが通訳をしてくれた。JWOCに韓国代表として出場していたのは憶えていたが、会って話しをするのは実は初めて。彼女は東大大会の運営責任者も勤めていた。通訳だけではもったいないくらいの「博学」だが、所詮韓国では「小娘」なのだと、自嘲気味に話していた。

韓国の運営者には情熱はあるし、会長の政治力もある。しかし、情熱を形にする力量を持ち合わせていない。またトップの政治力と現場の情熱がうまくかみ合っていない。それに気づけば、もっと韓国のオリエンテーリングは発展するだろう。僕らが今力を貸していることは彼らのためになるのだろうか、ならないのだろうか。韓国訪問中は、そんな自問自答の繰り返しだった。なんだか26年前の日本のＡＰＯＣを見ているようだ。帰りの飛行機は、めしも食わずに爆睡した。

▲通訳をしてくれた車さんはOLKの後輩だったが、先輩風を吹かせるのがためらわれるほど素敵で有能な女性であった。

4月28日

ゼミの後、県大の授業を２時間おこなう。いろいろあった韓国からの帰国で疲れていたが、ストレッチとリラクセーションを行なう今日の授業には期待していた。授業はたいていくたびれるものなのだが、なぜかこの授業だけは、毎年自分もすっきりした気分になって癒される。授業を終えてすぐに、利佳ちゃんと車で長良川に移動。

4月29日

長良川アドベンチャーレース。４時間の浅い睡眠だったが、朝の目覚めは悪くない。目茶苦茶元気だった。今回はMTBのロードで牽引をし、山では２台のバイクを担いで斜面を登る。そのパワーには、我ながらびっくり。しかし、得意なはずのナヴィゲーションでは、荒っぽさを露呈した。ファンタジスタの看板が恥ずかしくなる。

▲長良川アドベンチャーレースを終えて。反省することばかり。ファンタジスタの看板を掛け替えなくては。

5月2日

モンベルのトライ＆キャリーのために金沢に向かう。午後からやや興奮気味で、胸に圧迫感。あまりの息苦しさに22時すぎに金沢のホテルについてから走らずには居られなかった。気持ちよく走れ、スピード感もある。まだまだ先に行ける？そんな幻想を抱く。

5月3-5日

羽咋のトライ＆キャリーで。子どものためのオリエンテーリングと読図講習会を実施した。石川県協会のメンバー、埼玉の田中さんが運営ボランティアを申し出てくれた。コースを回ってきたばかりの小さな女の子が「また行く！」といって、親にもう一度チケット（１トライ100円という設定だった）を買ってもらう光景を一回でも見ると、このための費やした時間もお金も些細なことに感じられる。

トライ＆キャリーでは意外な出会いがあった。院生のころバイトをしていた都市計画の事務所に新人の建築士の女性がいた。その人がある時同人誌にカヌーから見た都市の眺めの話を書いていた。アウトドア風に見えなかった彼女がなぜカヌーに惹かれたのだろう。不思議だったので、印象に残っていた。

その後彼女は結婚して姓が「斉藤」になっていた。斉藤なんてありふれた名前だったが、カヌー＝アウトドアの連想で、ひょっとして彼女はトレッキングのエッセイなどで有名なシェルパ斉藤の奥さんになったのではないかと根拠もなく思った。確認する手段ももたないまま、この日、イベントに来ていたシェルパ斉藤さんに直接話をする機会を得た。僕が名乗ると、彼の方から、「かみさんと同じ都市計画の事務所で働いていませんでしたか？」と尋ねてきたのだ。そこで記念写真を１枚。

宿が取れなかったこの日は、田中さんのキャンプに入り込む。ピクニックテーブルを囲んで、オリエンテーリングの様々な話題を肴に飲む酒がうまい。

▲モンベルトライ＆キャリーでオリエンテーリングを楽しむ親子

5月5日

トライ＆キャリーでは、読図講習に25名の参加､オリエンテーリングに148名の参加があった。無料で地図をわたした引率の父母も入れると200人近い人たちがオリエンテーリングを楽しんだことになる。こういうタイプの人たちに次のステップを用意することができれば、オリエンテーリングの参加人口も徐々に増やすことができるだろう。

イベントは午前中に終わり、タイミングを見計らっていたかのように雨が降り出した。数年前のバレンタインデーに、突然ロッテガーナチョコレートを送ってきた卒業生が金沢にいる。ゴディバのチョコレートを贈られるより、10年以上も前に話した好みのチョコレートの銘柄を憶えてくれていたのが嬉しい。金沢に来たら是非とも彼女とデートをしないとと思い続け、ようやくチャンスがめぐってきた。石川のオリエンテーリング協会の森田さんに聞くと、「まだ（未婚で）実家にいるんじゃないだろうか」という（偶然二人は同じ職場であった）。電話してみると、この日の午後は空いているという。卒業間際に市の文化財団に職を見つけた彼女は、美術館を見てから葛きりとぜんざいのおいしい和風の甘味処というデートコースを設定してくれた。育休中

の彼女は「貴重な大人時間」を、僕はスローな時間を楽しんだ。

シェルパ斉藤さんと。世の中狭い。

5月10日

JOA理事会と総会。朝から眠気はあったが、無視して新幹線の中で1時間くらい仕事したり、本を読んだころ車中で突然脳の出力ダウンに見舞われた。以後、思考力は当社比30%に低下。よく理事会・総会を乗り切れたものだ。しばし喫茶店でぼーっとして、その後、600万の助成金を得たゆめ基金の打ち合わせとMnop総会。この総会に来るたびに、出てくるアイデアの豊かさに元気になる。

5月11日

スキーO実行委員会。資金的にも人材的にも懸案だらけのスキーOの世界選手権も、ようやくここまでやってきた。委員会の後時間が空いたので、横浜にいる母の見舞いに出かけた。つかの間のスローな時間。夕方東京に戻り、皇居一周。途中ペースの合いそうなランナーを見つけて追走。信号待ちの時に声を掛けると話しが弾んだ。シリアスに走っている人が近くにいる都会ならではの愉しみである。翌日は文科省で会議。

5月13日

静岡の私立大学に堀出知里が赴任してきた。ちょうど地図の熟練者がほしい実験をしていたので、実験&デートで楽しいひとときを過ごす。Hotel Californiaの第7曲目は、pretty maid all in a rowだった。

レース三昧

5月17日

富士見の50kmマウンテンバイクレースのため、山梨に向かう。朝からやや眠くて、たった100kmのドライブが辛い。利佳ちゃん、トリ、弘太郎と落ち合って、翌日のダウンヒルのコースを試走。利佳ちゃん以外の3人が同宿するのは世界選手権のマッピング以来だ。

翌日がレース。前半15kmがだらだらした林道を約1000m登る。その後、様々な路面が出てくる変化に富んだコースだった。後半入笠山の牧場に向かう登りのダートから谷底を見ると、緩やかな谷底一面に草が生えていた。スイスの高原の牧場が思い出されてリフレッシュ。450人中100位程度だったが、40歳代の中では25位。この年代、侮れない。

▲富士見の50kmMTBレーススタート前。左からトリ、利佳ちゃん、筆者。

5月23日

夕方はJOAでゆめ基金の教材開発のためのミーティング。その後山手線に乗って池袋に向かうと、聞き覚えのある女性の呼ぶ声がする。小学校の時の同級生だった。10年前の彼女の結婚式にも遠征でいけなかったので、14年ぶりの再会だった。昨年、病院を変えるに当たって、彼女と彼女のパートナーに世話になったので、会ってお礼をしたいと思っていたが、こんな形で会えるとは。

飯能での読図講習会のため、田中邸に泊めてもらう。トライ&キャリーの続きの飲みが楽しい。

5月24日

飯能での読図講習会。参加料が安いせいもあって17名の参加、7名のアシスタントスタッフを得た。屋外の講習の中で現在地把握課題の説明をするに従って参加者の目つきが変わってくるのは、読図講習会の一番の快感である。阿闍梨で楽しく打ち上げ。

▲今回の講習会では、阿闍梨その他のオリエンティアがアシスタントとして活躍。今後も広げていきたい活動だ。

5月31日

新富士でまどかさんを拾って、富士川のラフティングにでかける。彼女と静岡OLの鈴木さんと、6月末に富士川で行なわれるアドベンチャーレースに出るのだ。スペシャル講師の宮内まで現れて、講習モードでがっつりこいだ。その後、流れの読み方まで講習してくれた。ラフトの後は林道でMTBの牽引練習。今回はパワフルな鈴木さんがいるので、僕は地図読みに専念できそうだ。まどかさんを新富士に送って、夕方三島のロブの家にステイ。

▲アドベンチャーレースのトレーニング。視界の開ける伐採地で休憩&ぷち読図トレーニング。

6月1日

翌日は東大大会。好天だが、それほど暑くない。この季節としては願ってもないレース日和りだ。昨日の練習で使ったMTBを持っていたので、駐車場からは自転車で会場へ。このご近所感覚が楽しく、スローな気分にしてくれる。

東大大会は、出るかどうか散々迷った。ここ2ヶ月は日本平も随分走った。スピードはないが、ロングならある程度はいけるかも。それを試してみたい反面、来週は週の中3日が終日実験である上に、気の重い青少年健全育成の講演と今年はじめて行なう地震防災の授業で担当するリスクコミュニケーションの講義録を作る作業が残っていた。それをやるか東大大会に出るか？結局、自分を試したい誘惑が勝った。

レースはきつかったが、そのタフさとマクロにもミクロにも要求されるルートチョイスの多さが幸いした。1年半ぶりのエリート出場で、やはり1年半前と同じ5位。こういう結果が出ると、「なんだ。まだやれるじゃないか」という幻想が沸いてくる。二日間の練習で気分もリフレッシュ。家に帰ると、あっという間に地震防災の講義録のアウトラインができた。

利佳ちゃんの忠告に従って、この日から申し込みが始まる山岳耐久レースの申し込みを。朝ロブの家のネットからさせてもらう。2000名の定員は翌日夕方17時には締め切りになっていた。おそるべしトレランバブル。株価はどこまでも上がるのだろうか、それともバブルははじけるのだろうか？もしバブルがはじけたとしたら、そこに何が待っているのだろう？

（村越 真）